

大阪七墓巡り 復活プロジェクトについて（後）

観光家／コモンズ・デザイナー／社会実験者　陸奥賢

陸奥 賢（むつ・さとし）



観光家／コモンズ・デザイナー／社会実験者。一九七八年大阪・住吉生まれ、堺育ち。最終学歴は中卒。二〇〇七年に堺の「コミュニティ・ツーリズム企画で地域活性化ビジネスプラン」を受賞（主催・堺商工会議所）。二〇〇八年から二〇一三年まで「大阪あそ歩」（二〇一二年、観光庁長官表彰受賞）プロデューサー。二〇一一年から「大阪七墓巡り復活プロジェクト」「まわしよみ新聞」「読売教育賞受賞」「死生観光トランプ」「直観読みブックマーカー」「当事者研究スコロク」「歌垣風呂」「死生観光トランプ」などのコモンズ・デザイン・プロジェクトを手掛ける。大阪まち歩き大学学長。著書に『まわしよみ新聞をつくろう』（創元社）。



飛田新地の青春通りにある出世地蔵大菩薩（写真提供：陸奥氏）



大阪市阿倍野区にある大阪市設南靈園（写真提供：陸奥氏）

四、七墓巡りの謎の消滅

江戸時代に一世を風靡した七墓巡りだが、明治以降は一気に廃れて、昭和には完全に影も形もなかったという。「なぜ、なくなつたのか？」の理由も不明な部分が多いが、大阪が近代化するに当たっての都市改造で、墓地の移転や統廃合されたことの影響は大きかつたと筆者は推測している。

例えば大阪市域の北側にあった梅田、南濱、葭原の墓地などは、長柄墓地（現在の大阪市設北靈園）に移り、小橋、千日、飛田などの大阪市

域の南側に位置する墓地などは阿倍野墓地（現在の大阪市設南靈園）に移転された。
墓が点々とあるから、それらの点を繋ぐライン（線）が巡礼の街道となるが、点が集約されてしまうと、ラインがそもそも発生しない。結果として巡礼がなくなると、道中の遊興がなくなる。歌舞音曲で練り歩いたり、酒を飲みながら舟を出すといった「遊び」が成立しなくなることで、七墓巡りは人気を失ったのではないだろうか。

さらに江戸時代は町の管理だった墓地が、行政の管理になったので、七墓巡りなどは旧弊な

悪習と見なされて排除されたことも考えられる。近代国民国家や近代都市というのは住所不定の流民などを嫌う。税の徴収や兵役の義務を課すためには、必ず国民一人ひとりを住所などで管理することが必要で、七墓巡りのような「無縁者の集まり」などは、いかにも反社会的（反近代的）で、けしからん行事と目される。無縁者の集まりで、講社のような組織がなかつとも、この風習があつといふに廃れ、雲散霧消することにも繋がつたように思われる。

また、「豊臣方の供養」という意味合いが七墓にあつたのだとすると、時代が徳川の時代から明治維新で変わり、正々堂々と豊臣の供養ができるようになつた影響も大きいのかも知れない。

いま現在、七墓のほとんどは繁華街（梅田、千日）や住宅地（葭原）、公園（小橋）、道路（飛田）などに変貌してしまい、地元住人も自分のまちが元墓地であつたことなどすっかり忘れてしまつてていることが多い。

ちなみに、よく聞かれるのが、「なぜ『七つの墓』なのか？」「『七』という数字の意味は？」という謎なのだが、これも正直、よくわからない。しかし、かつて七墓のひとつずつ千日刑場の前には蓮登山自安寺があつた。この自安寺は妙見堂や能勢妙見遙拝所を構える妙見信仰の寺院だつたという。

妙見信仰というのは北極星、北斗七星を崇める星辰信仰で、妙見菩薩はその中心に位置する北極星の象徴仏という。北極星は北の夜空に